

吉田 少し話を広げまして、先生が漢字教育に取り組もうとしたきっかけとか、あるひはそれをやっ行って行かなければならないといふ使命感とか、さういふものがどういふ風にして発展して来たかといふことを伺<sup>う</sup>きたいわけですが.....。

石井 私は大学を出ると最初は学者になるつもりでした。しかし戦争中でしたから学問が出来ないで半年繰上げ卒業といふことで、直に戦場へ出されました。当時の誰<sup>だれ</sup>もが考へたやうに、国のために身を捧<sup>ささ</sup>げるといふことに、道を見出すより仕様<sup>みやう</sup>がなかったわけです。それで、終戦までに、いくたびか死ぬ可能性の多いやうな場面<sup>なげ</sup>にぶつかったわけですが、結局終戦まで生き永らへました。

そしてその時、この敗戦を立て直すのに役立つといふことが、自分よりも先に死んで行った戦友たちに報いる道じゃないかといふことで、考へたのがやはり教育だと思ったわけなんです。そしてこの道でとにかく立て直さなければならぬ。それこそ石<sup>かじ</sup>に嚙りついてでも、日本を立て直さなければならぬと考へました。最初母校の高等学校に勤めました。そして昭和 24 年に中学教師になりました。そこで始めて小学校から入って来たばかりの中学生を実際に

指導して、学力が非常に低いのに驚きました。ことに読み書き能力がさうなのです。それで、中学へ行きまして、一番先にした調査が、数学と社会科と理科の教科書に用ひられてゐる重要な言葉を、百語づつ選びまして、それをテストしてみたら、半分しか読めないんですね。

これは小学校教育から考へ直さなければならぬといふことを、その時に感じました。ところが、ちょうどそのころ教育委員会制度が出来上がりまして、私は八王子に居りましたから、八王子の教育委員会が出来たその最初の指導主事にならないかといふ話があったものですから、これも一つの勉強だと思ひまして、それで昭和 26 年に指導主事になりそれ以後小学校教育にたづさはるやうになりました。

吉田 普通ほかの教科の字が読めないとか何とか言はれると、国語教師のせみだなどと言はれて、国語の先生は一所懸命書き取りばかりやらせる。そのところへ追ひ込まれると、結局生徒も書き取りばかりではいやな訳ですから、うまく行かなくなつて、おたおたするといふのが普通なんです。その時に先生は、下から来る小学校

の段階が大事だといふ風に考へられて下へおりて行かれたといふのが、教育的に考へて非常におもしろいですね。

さて、それでずっと長い間教育の仕事をおやりになってゐる場合に支へになってゐるのは、日本の教育をよくしなければならぬ、そして、学問の方も学問の方でやらなければならないけれども、同時に教育がなければ、学問といふものも成り立たないとお考へになったわけですか。

石井 学問も成り立たないし、たとへば現在のやうに幼児教育で漢字をやりますと、よく言はれることは、幼児に対してはもっとすべきことがあるのではないか、例へば情操教育だとか、道徳教育だとか、社会教育だとかと、いろいろなことをいふわけです。しかし、やはり基本は日本語といふものを正しく理解し、その日本語を正しく盛るところの器である漢字といふものの理解を、深めなければ、情操教育でも、道徳教育でも何の教育でも成り立たない。さういふやうに私は考へる訳です。

吉田 昔の教育だと、読み書きといふのと経験といふのを分離して考へてゐるわけですね。経験をやれば読み書きが出来なくなる。読み

書きをやれば経験の方がおろそかになるといふ風に考へてみたわけですが、実際はさうでなくて、経験といふものも言葉があるから経験が出来るので、ただ何かしてゐるといふんでは、経験にならないといふ問題ですね。その点は心理学では最近非常に気がついてきましたね。やはり言葉といふものが媒介になるんだと。<sup>もちろん</sup>勿論字だけではありませんけれども、全体の話し言葉を含めて、言葉といふものなしで経験してもから<sup>まは</sup>廻りになってしまふ。さういふことを実際にやる中で気がつかれたといふことですね。

石井 ですから、私ども三歳や四歳の子供に、例へば「熱い」といふ字を教へるにしても、牛乳びんに熱いといふ字を<sup>は</sup>貼りつけて、それに熱湯をそそいで子供たちにさういふものを触れさせる。つまり熱いといふ経験と、熱いといふ文字を結びつけるといふやうに努力してゐるわけなんです。熱いといふ字によって、熱いといふ経験がそこでよみがへらなかつたならば、それは本当に読めたことにならない、つまり経験を、言ふならば文字で整理するわけです。そしてまた経験といふものを、いつでも文字によって代表させることが出来る。さうならなければ、本当に漢字が物になったとは言へな

い。

吉田 さういふ意味で、具体的な経験といふのを疎<sup>おろそ</sup>かにして、字ばかり教へ込まうといふのは大変に疑問なことです。うっかりすると、今の教育全体の流れは、経験の地盤<sup>ちばん</sup>なしに字を教へよう、概念を教へようとしてみますね。

石井 全く経験を無視した文字で、文字の生命を無視して、単に機械的にそれが書けるやうになればいいといふやうな、テストに書ければそれでいいといふやうな、かういふ漢字力であるならば、これは全く無意味であると思ふのです。

吉田 さういふ点で、幼稚園に広まって行けば行くほど、お母さんや先生方がへたに誤解をして、とにかく字をたくさん覚え込ませればいいといふ風になりかねない情勢は世の中にありますね。

石井 ですから、「漢字を教へてはならない。漢字で教へよ」、これは簡単な言葉ですけども、これを私は幼稚園でやる先生にはひとつの合ひ言葉のやうにしてもらってあるんです。つまり「漢字を」といふのと、「漢字で」といふのとの違ひを先生方に考へてもらふ、かう思っているわけです。